

律令国家転換期の須恵器窯業

北野博司

The Sue Ware Industry during the Transitional Period of the Ritsuryo State

KITANO Hiroshi

はじめに

- ① 転換期の土器様式
 - ② 宮都の須恵器と周辺の窯業地
 - ③ 諸国の窯業地と窯構造
 - ④ 列島各地の転換期窯業
- おわりに―転換期窯業の歴史的意義―

【論文要旨】

小論では律令国家転換期（八世紀後半―九世紀前半）における須恵器生産の変容過程を検討し、その背景を経済、社会、宗教の観点から考察することを目的とした。ここでは各窯場の盛衰、窯業技術（窯構造・窯詰め・窯焚き）、生産器種の三点を主な検討対象とした。

列島の大規模窯業地では都城周辺にあった陶邑窯の衰退が顕著で、代わって生駒西麓窯など都市近郊窯の生産が活発化した。理由の一つは流通経済の発達を背景に、交易に有利な近郊窯の利点が生かされたためと考えた。流通状況の検証は十分ではないが、播磨や讃岐、備前の須恵器が入り込むのも瀬戸内海運の発展と関係が深いとみられる。

もう一つは宗教面から、服属儀礼的な意味あいがあった陶器調納システムや、大甕等を用いた王権儀礼そのものが、国家仏教興隆期の八世紀中葉から変質していき、その主力を担ってきた陶邑の須恵器供給地としての役割が相対的に低くなった可能性を想定した。

一方、各地の窯場では転換期に共通した生産戦略がとられた。それはコストと品質

のバランスにおいて経済性を優先する方向への変化であった。須恵器窯業の六世紀末、七世紀後半の二度の画期では、各地で生産戦略だけでなく導入される技術の共通点も多かったが、八世紀後半の特徴は技術の選択に多様性が生まれ、その後、地域色が明瞭になっていったことである。大きく四つの地域類型を設定した。

第一は集約的な須恵器生産からいち早く離脱した陶邑窯や牛頭窯である。相対的に自立度の高い周辺在地社会が共同体祭祀や儀礼的飲食の衰退によって須恵器需要の低下を招いたことが一因と考えられた。第二は技術力を生かして産地のブランド的地位を築いていった東海の猿投窯である。周辺は瓷器系陶器の一大生産地となった。第三は流通経済と都市に近い利点を生かし、器種別分業を取り入れるなど新しい須恵器産地に発展していった播磨や讃岐である。第四は伝統的な須恵器生産を継承する面の強かった北陸や関東、東北の諸窯である。畿内とは逆に、須恵器需要を担う在地社会の支配関係や経済、宗教に保守的な性格がみられた。転換期窯業にみられたこれらの地域色は古代末―中世初の焼物世界への端緒ともなった。

はじめに

本稿は律令国家転換期における須恵器窯業の変革を明らかにし、その背景を社会経済史の視点から多面的に考察することを目的とする。窯業は他の手工業に比べて遺跡や遺物が残りやすく、考古学的に生産・流通・消費の実態を分析しやすい分野といえる。また、古代の須恵器窯業は東北方北部から九州地方南部まで広く行き渡り、資料的普遍性を持っていることから列島規模で地域色を検討できる利点がある。

窯業製品は王権中枢部の儀礼や官僚への給食容器として大量に供給され、各地域の行政・宗教拠点となった国衙・郡家・寺院等でも宮都に準じた祭祀や儀礼が行われ、土器使用の高まりがみられた。また、在地社会でも首長層は須恵器窯業を積極的に経営し、これを政治・経済・宗教など多角的に運用して民衆支配を実現していった。窯業は一義的には生産や流通といった経済動向を窺い知る資料ではあるが、このように政治制度や精神文化との関わりも深く、その考古学的研究が当該期の歴史研究に果たす役割は少なくない。

窯業生産の展開から分業や流通の問題を論じたこれまでの研究は、対象を特定の地域に限定したものや、土器様式の分析が中心であった¹⁾。窯業を古代国家の社会経済史のなかに位置付けるためには、列島規模の比較研究や、生産の中核をなす窯場の遺構とその技術の分析が欠かせない。本稿はこの点に留意し、須恵器窯業に絞って律令国家転換期の技術、流通、使用実態の変容を明らかにしてみたい。

時期は八世紀前葉～九世紀中葉を主な検討対象とし、区分は暦年代が知られる平城宮土器編年〔西一九七六〕と平安京土器編年〔小森一九九四〕に基づき、平城Ⅱを八世紀前葉、平城Ⅲを八世紀中葉、平城Ⅳ・Ⅴを八世紀後半、平安京Ⅰ中〔平城Ⅵ〕を八世紀末～九世紀初、平安京Ⅰ新〔平

城Ⅶ〕を九世紀前葉、平安京Ⅱ古を九世紀中葉と表記する。なお、平城Ⅱ・Ⅲをあわせて八世紀前半とする場合もある。

① 転換期の土器様式

窯業生産の展開を論じる前に、まず宮都の土器様式を概観しておきたい。七～九世紀の土器編年は、飛鳥・藤原京、平城京、長岡京、平安京から出土した、暦年代が推定できる一括土器群をもとに組み立てられてきた。その間を複数の土器様式を統合した大様式としてみた場合、二つのまとまりとして捉えられる。七世紀後葉～八世紀の土器群は「律令的土器様式」〔西一九八二〕、九世紀～一世紀前半の土器群は「前期平安京的土器様式」〔小森一九九四〕や「平安京型土器様式」〔高橋一九九九〕といった名称が与えられ、その特質が議論されてきた。ここでは内容には立ち入らないが、いずれも消費の場における焼物の複合体としての土器様式という概念を用いて当該期の文化理解を試みている。

多様な焼物の複合体である土器様式の展開には、その前後に萌芽（成立）段階、変質（崩壊）段階といったプロセスを見て取れることが多い。萌芽期は前様式の要素が色濃く、変質期は次の新しい様式の萌芽期である場合が多いので、どの要素に注目するかによって画期の位置と評価は自ずと異なってくる。

七～九世紀の土器の推移を概観すると、金属器指向型を基調とする「律令的土器様式」と、九世紀前葉に始まる磁器指向型の二つの土器群がある〔西一九八二〕。「律令的土器様式」の概念はその後批判的に継承され、現在では「宮廷土器様式」〔巽一九八九〕や「宮都型（藤原・平城宮型）土器様式」〔高橋一九九九〕の名が提唱されている。これは七世紀初頭に萌芽があり、七世紀後葉～八世紀前半に成立・安定し、八世紀中葉から崩壊に向かう。そして九世紀前葉には新たな唐風意匠の施釉陶器が加わり、

九世紀中葉には須恵器が衰退して「平安京型土器様式」が成立する。

一方、土器様式の変質期である八世紀中葉は、須恵器壺しや土師器碗A、黒色土器など九世紀に主体を占める形式・技術の出現期である。また、八世紀末～九世紀初頭には八世紀中葉に萌芽したこれらの要素が目立ち始める。土器全体に占める須恵器の比率は、八世紀前半の平城宮では五割程度であったが、八世紀後半に三～四割〔玉田一九九二、小森二〇〇五〕、八世紀末～九世紀初頭には長岡京で二～三割〔秋山一九九二a〕、平安京では二割弱となる〔平尾一九九二〕。平安京域でみる小型食器の推移でも、常に七～八割を占める土師器を除くと、八世紀末～九世紀初に須恵器が約八割を占めていたのに対し、九世紀前半に五割弱、九世紀中葉に二割に減少する〔平尾一九九二〕。それに代わるように増えてくるのが、施釉（緑釉・灰釉）陶器、黒色土器である。

国産施釉陶器増加のプロセスも段階的である。八世紀末～九世紀初頭に奈良三彩の系譜を引く緑釉単彩陶器が出現する。器種は羽釜や甗、火舎、碗などがあり、喫茶具として〔巽一九九一a〕限られた場所で使用されたのに対し、九世紀前半からは碗皿主体の量産型緑釉・灰釉陶器が出現して、九世紀中葉には食器に占める施釉陶器の量が須恵器を凌駕する〔平尾一九九二〕。量産型施釉陶器の出現は意匠の上では中国磁器指向を特徴とする新様式のはしりとして重要であるが、技術的には外来要素を強調したかつての革新性〔西一九八二、坂野一九七九〕は再検討され〔尾野一九九八〕、使用場所が宮廷周辺に限られる点からも大様式の画期とはしない見解が主流である〔小森一九九四、高橋一九九九〕。須恵器についても、従来注目された九世紀初頭頃の技術革新〔田中一九六四〕が過大に評価できないことは先に述べたことがある〔北野二〇〇一〕。

以上のように、七～九世紀の土器様式は個々の型式（意匠、技術）の消長やその出現頻度が段階的・漸移的であっても、概ね七世紀後半～八世紀前半、八世紀後半～九世紀初頭ないしは前葉、九世紀前葉ないしは

中葉～一〇世紀前葉の三つの大別様式にまとめることができる。このような大別様式の区分と画期の評価は列島全体、あるいは各地の土器編年でも概ね共通しており、窯業の動向が広域に連動していたことをうかがわせている。消費をも視野においた多様な焼物複合による編年と須恵器や施釉陶器の型式変化を重視した生産地編年では大画期のとらえ方に違いが認められるが、八世紀前半を帰結点として成立した土器様式が八世紀後半から変質、解体し、九世紀に新たな土器様式が成立するという理解は各地の土器編年に共通する。

以下では、律令国家転換期の土器様式の理解に大きな影響を与える須恵器窯業の展開を窯構造や流通の面からみていきたい。まず宮都周辺を検討し、次に列島各地の窯業の変化と対比してみたい。

② 宮都の須恵器と周辺の窯業地

（1）宮都の須恵器

律令国家は宮で使用する「陶器（須恵器）」を諸国からの貢納や市での交易によって入手した。〔延喜主計寮式（以下、主計式）〕によれば、調雑物として須恵器を貢納したのは摂津・和泉・近江・美濃・播磨・備前・讃岐・筑前（大宰府への貢納）の八カ国である。このような須恵器の調納制は史料から大宝令制下に遡ることが知られ〔浅香一九七二〕、考古資料からは評制段階、天武朝まで遡ることが指摘されている〔巽一九九九〕。貢納された土器は官人たちの給食器や各種貯蔵容器、祭事用具などに充てられたが、主計式記載の輸量や国別割合が消費の実態であったわけではない。実際にははるかに多くの土器が宮で使用され、八世紀後半には主計式にはみえない大和や尾張産の須恵器が多くなることはよく知られている。これは、調による貢納がもとともミツキの流れをくんだ服属儀

礼的な性格をもっており「森一九九四」、主として国家的な祭祀用具の調達を目的としていたからであろう。主計式にみえる和泉産須恵器は特に貯蔵具や特殊品で高率を占めており、神祇式四時祭用陶器の構成からも、陶邑の調が古代国家の祭祀に不可欠であったことを物語っている「森一九九四」。さらに踐祚大嘗祭といった最高レベルの儀式において、主計式にみえない河内（主に土師器）・参河とともに尾張が加わっているのが示唆的である。尾張に割り当てられた器種は高盤や筥坏のような小型食器のほか、甕・甕・缶・酒瓶・瓮・罎・都婆波・酒垂などの貯蔵具に重点が置かれており、この点は平城宮から八世紀後半に出土する「原始灰釉」に象徴されるような猿投産貯蔵具の優品を想起させる。

尾張猿投窯は古墳時代以来、器形や技術において保守的な性格をもち、陶邑とは一線を画していた。飛鳥では七世紀に猿投産とみられる須恵器が一定量流入し、藤原宮期頃には猿投産が陶邑産を凌ぐようになる「森一九九四」。ところが、平城宮期の八世紀前半になると陶邑産が主体を占めた。そして、後半代には大和や尾張といった主計式に規定のない国の製品が増加した。

このような流通の実態から主計式の規定が実効したのが八世紀前半代とする見方「森一九九四」がある一方で、調納品の歴史的な性格、使用の場や廃棄方法を踏まえ、平城宮出土土器の総体はむしろ市での購入の実態（市に供給される土器の傾向）を反映するといった意見「森一九九七」が提示されている。奈良時代において国の財政を支える調庸物の収取が、中央や地方の交易圏、流通経済と深くかわりながら存在し、官人官司の物品確保も封戸物の市での交易や銭貨購入によって成り立っていた「奈良一九七三」ことからすれば、調納物として必ずしも実物運京されたとは限らないし、宮内で消費された土器の多くは中央市での交易品とみるのが妥当と思われる。八世紀後半から増加した大和（生駒西麓）産など都市近郊窯の製品もこの流通システムによって供給されたものであろう。

（2）陶邑窯跡群

大阪府南部の陶邑窯跡群は五～九世紀に営まれた列島最大規模の須恵器窯業地である。五世紀前半から王権の膝元で各種手工業生産拠点のひとつとして発展していった「菱田二〇〇四」。五世紀末～六世紀初頭の地方窯拡大後は列島遠隔地への広域供給は急減するが、新式群集墳が盛行する六世紀代の畿内中枢部では、陶邑産須恵器が主体をなした。畿内では群集墳期に生産が活発であった摂津千里窯も七世紀中葉には衰退する。

陶邑窯跡群の時期別の窯数は、六世紀後葉から七世紀初頭にピークがあり、その後一旦減少し、七世紀末～八世紀前半に再び増加する「重見二〇〇二」。それが大きく転換するのは、八世紀中葉で、八世紀後半以降は窯が半減する。これは先に述べた平城宮の土器組成に占める須恵器の割合の変化とも対応する。

次に窯構造から須恵器生産の変容のあり方をみていきたい。筆者は先に列島の大規模窯業地（大阪府陶邑窯、福岡県牛頭窯、愛知県猿投窯、石川県南加賀窯）の窯構造の変遷を比較し、各窯跡群では自然条件や文化伝統に基づく個性的な窯造りの特徴をもちつつも、窯構造が技術面の内的要因だけでなく、社会経済や政治の変化と密接に関わりながら推移し、方向性を同じくする共通した画期が見出せることを指摘した「北野二〇〇四」。

陶邑窯では六世紀後葉に寸胴形の細長いB形式窯が主体となった。床面は弓なりから直線的・急傾斜となり、砂床から地山床へと変わった。群集墳期の需要の高まりに應えるため、製品の質よりも大量生産を志向した改良の結果と解釈した。次いで七世紀後半には二つの新しい形式の窯が登場した。一つは列島各地にこの時期広く採用された地下式直立煙道窯（C形式）である。中型で床面傾斜が緩いこの窯は蓄熱性に優れ、コストはかかるが良質の製品を得るのに適している⁽⁵⁾。もう一つは、C形

式窯を大甕生産用に特化させたCH形式窯（TK三六号窯など）である。陶邑固有の形式で分布はTK・MT地区に集中する。水平な床面に丸底が安定するような据え付け穴や焼台を設置し、大甕を八〇個並列する。倒焰式で奥壁には下部に三箇所の通気孔を設け、煙室、直立煙道へとつながる。高品質な大甕需要に応えるために出現した窯構造と考えられ、C形式窯よりやや遅れ八世紀前半に盛行する。両者は陶邑東部のTK・MT地区で採用されたが、中西部のTG・KM地区ではB形式の系譜を引く伝統的な窯構造が展開した「白石一九九九」。技術の革新性・保守性から支群・経営者層の性格の違いを窺うことができる。

陶邑の窯構造に大きな変化がみられるのは八世紀後半からである。田辺昭三氏は陶邑の衰退期と位置付け、窯の小型化や焚口形態の変化を指摘、全国的には生産地の地方拡散がさらに進む画期とし、地方官衙の整備や寺院政策との関係を想定した「田辺一九八二」。

陶邑の窯は地下式のC形式にかわって半地下式・地上式のD形式（KM二九号窯）が一般化する。田辺氏が早くから注目した焼成部最大幅を手前におき、焚口が大きくハの字状に広がる形態の窯である。類例は丹波篠窯（西長尾奥第二一号窯）や摂津相野窯（地福六号窯、播磨志方窯（札馬二号窯）・相生窯（大陣原二号窯）など、畿内周辺部に⁶⁾広く分布する。八世紀中葉頃に出現し、小型食器類主体の生産を行っている。CH形式も床面傾斜のある半地下式・地上式となり、通気孔のある奥壁や煙室はみられなくなる（MT二〇八、二〇九―I号窯）。傾斜の緩いC・CH形式窯では焼成部最大幅が中ほどにあり、大甕は奥半にも設置していた（TK一一六号窯）が、D形式窯は焼成部奥半が先細りで傾斜が増しており、中型の貯蔵具や、数を減らした大型品は火前より移動した可能性がある。

このような窯構造や窯詰めの変化は、前段階の高品質志向から、一定の品質を保ちつつ製品の大小に応じて一窯を効率的に焚くというコスト

志向への転換とみられる。八世紀中葉からは杯類の柱状重ね焼⁷⁾きが一般化し、八世紀後半には杯蓋口縁部の平坦化、焼きしまりの低下がおこる。これは重ね焼きの安定と溶着防止を図るための技術的適応といえよう。

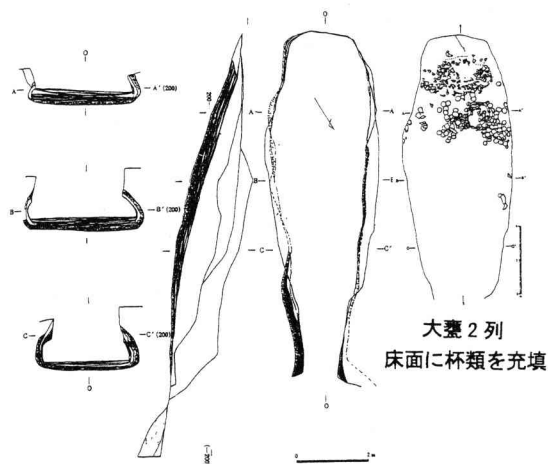
この間の窯構造の変化からうかがえることの一つに、大甕生産の衰退（生産量・質）があげられる。大甕は受量一石以上的大型貯蔵容器でミカ・サラケと称され、醸造発酵食品（酒・醬・酢など）の生産や保管などに用いられた「関根一九六九、巽一九九五」。大甕は造酒司や宮内各役所で用いられたが、延喜神祇式の四時祭にみるように国家祭祀にも不可欠な器物であり、主計式では和泉等にその調納が⁸⁾あてられている。今のところ都城での大甕出土量を⁸⁾うかがうデータはないが、陶邑の窯構造の変化が大甕生産の衰退を示唆するとすれば、それは国家中枢の祭祀や調納体制の変容とも関わる重要な問題をはらむと考える。

（3）生駒西麓窯跡群

奈良県北西部、平城宮の西にある窯跡群。陶邑窯跡群の衰退と入れ替わるように八世紀中葉から生産を開始し、八世紀後半に盛行する。製作技法が類似しており陶邑窯の技術系譜を引くとされる「巽一九九一b」⁹⁾。八世紀後半には平城宮出土須恵器の主体となる産地の一つである。窯構造の詳細が報告されたものはないが、薬師堂川窯跡群、妙心寺窯跡群、北新町西窯跡など、確認されたものはすべて半地下式とされている「生駒市教委一九八八」。

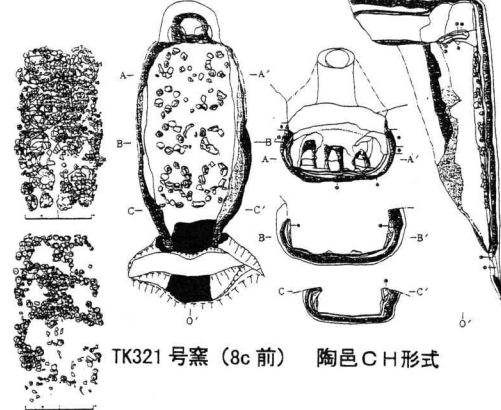
（4）木津・加茂窯跡群

七世紀前半に成立した山城南部（相楽郡域）の拠点的な窯跡群である。山城各地の窯場が八世紀中葉を境に廃絶ないしは生産を縮小するのに対し、この頃から窯数が増加するのが特徴である「高橋一九九二」。なかでも八世紀中葉の西櫛窯「加茂町教委一九八二」は、大型品を含む法量分化し

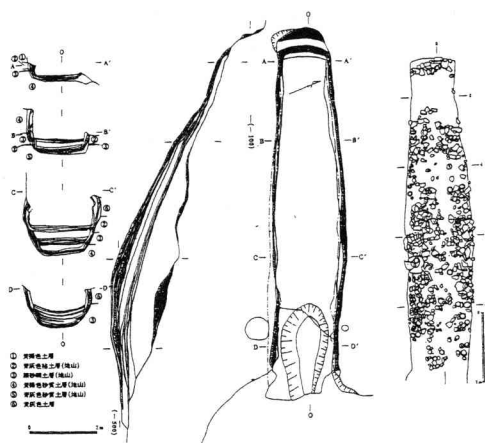


MT206-I号窯(5c後) 陶邑A形式

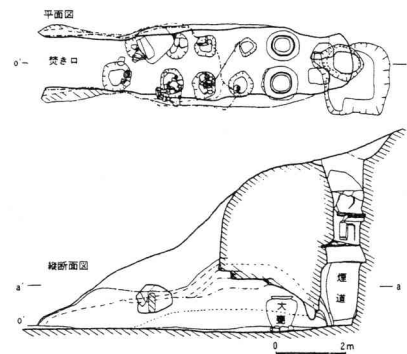
大甕8個 床面に杯類を充填



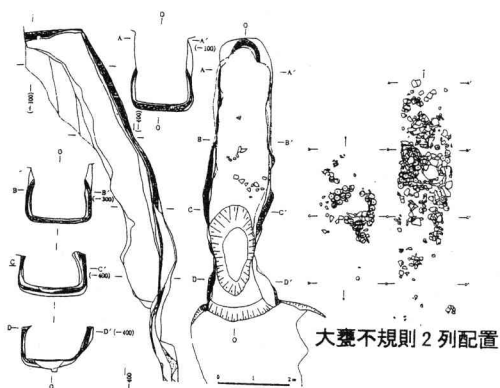
TK321号窯(8c前) 陶邑CH形式



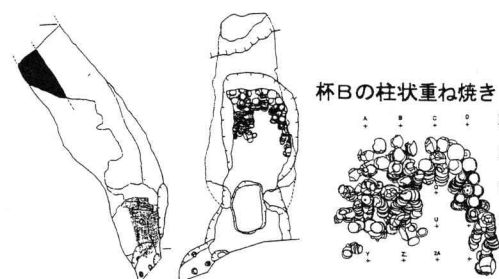
TK230-II号窯(6c後) 陶邑B形式



TK45号窯(8c前) 陶邑CH形式



TK116号窯(7c後) 陶邑C形式



美濃須衛天狗谷7号窯(8c後)



戸津47号窯(10c前)
南加賀E形式

図1 窯構造と窯詰めの変化(1/200)

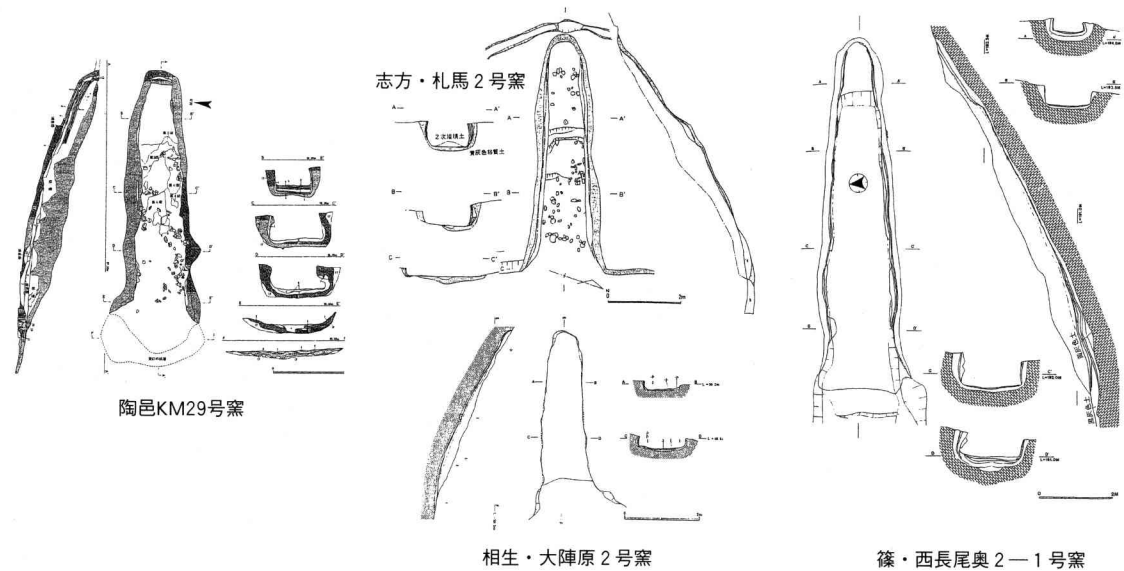


図2 近畿地方の転換期の窯構造(1/200)

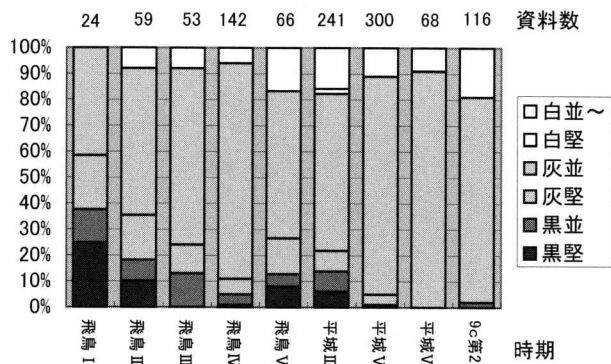
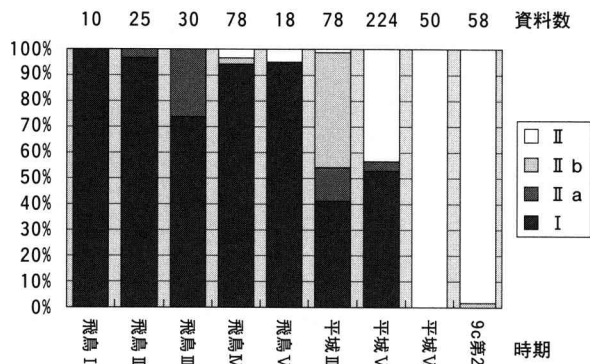


図3 都城出土須恵器杯類の色と焼き縮まり



飛鳥I：山田道3次、川原寺下層SD02、甘樫丘東麓SX037
 飛鳥II：坂田寺SG100、飛鳥水落
 飛鳥III：石神SE800、大官大寺SK121
 飛鳥IV：藤原宮内堀
 飛鳥V：下ツ道SD1900A
 平城III：平城京長屋王邸SD5100
 平城V：平城宮SK5283
 平城VI：興福寺（旧一乗院）
 9c第2：平城京SD650A

※重ね焼きの分類は北野1988による。グラフでは「不明」分を省いている。

図5 都城出土蓋杯の重ね焼き

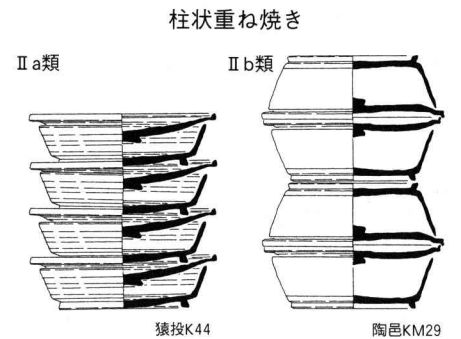
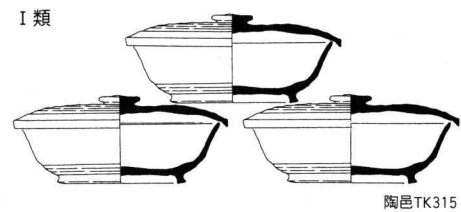


図4 蓋杯の重ね焼き分類図

た食器組成や杯皿類の製作技法などに平城宮出土土器との共通点がみられる〔高橋一九九二〕。西柵窯は半地下式の細長い焼成部をもち、最大幅が燃焼部口にあるD形式に近い形をしている。

(5) 松井・交野ヶ原窯跡群

京都府京田辺市松井窯〔江谷一九八二〕と八幡市交野ヶ原窯〔八幡市教委一九七九〕は長岡京の南方に位置する窯跡群で四基が知られている。木津・加茂窯跡群が衰退した八世紀末から九世紀初頭にかけて操業した。形態的特徴や胎土分析から長岡京への供給窯の一つとみられている〔秋山一九九二b〕。窯構造の詳細は不明ながら、松井窯の一基は報告書の記述から燃焼部口がハの字に開くD形式の可能性がある。

(6) 丹波・篠窯跡群

平安京の西、京都府亀岡市にある窯跡群。窯数は百数十基ともいわれる〔石井一九八三〕。八世紀中葉頃から新たな生産活動が始まり、九〜一〇世紀へ継続する。その間、生産が活発化する八世紀末〜九世紀初頭、窯構造が転換する一〇世紀前半にそれぞれ画期が求められ〔石井一九八九〕、後者ではそれまで平安京北郊で展開していた緑釉陶器生産を取り込むようになる。

八〜九世紀の窯構造はすべて半地下式で、初期には西長尾奥第二窯跡群一号窯〔財団法人京都府埋文一九八九〕のように、奥が先細りで最大幅を手前に置き、燃焼部が開くD形式が採用されている。

(7) 小結

畿内中樞部の須恵器生産はいずれも八世紀中葉に画期が認められた。窯数は陶邑窯が急減に転じ、代わって都市近郊窯が増加した。それに従い平城宮では生駒西麓産の増加が認められた。七世紀後葉〜八世紀前半

は陶邑の地下式窯（C形式、CH形式）にみるように相対的に高コスト高品質生産であったが、八世紀後半は半地下式窯に転換し、コスト削減の方向へシフトした。八世紀後半は平城宮出土須恵器の品質（硬さや色調）に変化が生じてくる。すなわち、色調の暗いもの、焼き締まりの強いものが減少し、灰色で中程度の堅さのものが大多数を占める〔北野二〇〇四〕。これらは非畿内産を含むとはいえ、陶邑窯や都市近郊窯の窯構造の変化を反映したものと考えられる。

八世紀後半に食器は法量分化の減少、法量の縮小化（大型品の減少）がおこり、成形技法の面からは須恵器杯蓋のケズリ調整省略、土師器の暗文消滅、c手法（外面ヘラケズリ）の卓越など、全体としてみると作り分けや製作工程の省力化、原材料の節約がはかられたことになる〔異一九九一a〕。

食器類の生産量については、窯数の減少と蓋杯類の柱状重ね焼きによる増産との差し引きをどうみるかという問題が残るが、八世紀後半以降の土器組成における須恵器量の低下を考えると、この時点で絶対量が減少に転じた可能性は高いと考える。しかし、陶邑の生産量が落ちた分、生駒西麓窯や松井窯、篠窯などいわゆる都市近郊窯がこれを補い、さらに尾張産等が流入することで須恵器消費量〔玉田一九九二〕の減少は九世紀前半まで漸移的であった。

③ 諸国の窯業地と窯構造

(1) 筑前・牛頸窯

牛頸窯（福岡県大野城市周辺）は大宰府に近接する九州最大の窯業地である。築窯方式は六世紀から九世紀まで一貫して地下式構造をとる。六世紀の大型排煙口溝付窯や六世紀末に半島技術を導入して創出した多

孔式煙道溝付窯など、特徴的な窯構造を生み出してきた窯場である。七世紀中葉～後葉には陶邑でみた地下式直立煙道窯が出現し、八世紀前半にはこれに統一される。窯は全体に小型化が顕著で、窯体長二・五～五・〇メートル、七メートル前後の規模となる。興味深いのは同一窯跡群内に大小の窯を作り、小型食器や大甕がある程度焼き分けていた「池辺ほか一九八八、中村ほか一九八九」とされる点である。

八世紀後半にはさらに小型化が進み、窯体長五メートルをこえるものが無くなり、これ以降大甕生産が途絶えるという「石木二〇〇四a」。須恵器生産は九世紀初頭ではほぼ終焉を迎えるが、八世紀中葉以降、小型窯（二～三メートル）では焼成部床面傾斜が四〇度以上となり、床面・側壁は焼き締まりの弱い黄褐色を呈する「石木二〇〇四a」。このような顕著な小型急傾斜化は尾張猿投窯や南加賀窯で生産終焉期の九世紀末～一〇世紀になって出現したものである。蓄熱より昇温重視だが、小型のため窯内温度のばらつきは少なく、作り変えや管理のしやすい低コスト窯ではなかったか。さほど焼き締めと還元色を得る必要のない小型食器の生産には適していたのだろう。消費遺跡でも黄褐色の須恵器杯類が多数出土している。

八世紀中葉から九世紀初の窯は一〇〇基を超え「石木二〇〇四b」、一見堅調な須恵器生産に思われるが、その実態は一窯の生産量が少ない小型窯主体の経営である。生産は八世紀末～九世紀初に急速に衰退し、九世紀前半にはほぼ消滅する。これは大宰府の土器編年「中島二〇〇五」とも合致する。

牛頸窯の八世紀前半にみられた窯の作り分けと製品の焼き分けは、窯場での器種別分業の早い例として注目される。八世紀後半にはさらに焼成コストを抑え、いち早く大甕生産を放棄、九世紀前半には須恵器生産そのものから撤退した。これは大宰府やこれを取り巻く在地社会が、大甕を用いた祭祀や須恵器食器（青灰色焼締土器）を用いた儀礼を必要と

しない社会に移行したことをうかがわせている。須恵器の生産と大宰府周辺の土器組成「中島二〇〇五」を見る限り、その変化が畿内以上に早いことが注目される。

（2）尾張・猿投窯

五世紀半ばに開窯した猿投窯（愛知県名古屋市中・日進市・三好町ほか）は東日本最大規模の窯跡群である。猿投窯の蓋杯は六～七世紀に伝統を色濃く残す個性的な型式変化を遂げていくが、同様に窯構造や成形技法（ロクロ回転）も保守的な面をもつ「北野二〇〇四、北野ほか二〇〇二」。生産は七世紀後葉から岩崎地区などへ拡大し、薄作りのシャープな食器や内面黄土塗りの大甕など、多くの優品が飛鳥へ供給された「城ヶ谷二〇〇五」。猿投では七世紀後葉まで窯体長一〇メートル～一三メートルの大型を維持する（岩崎一七号窯、丁子田一号窯）が、七世紀末から小型化し、岩崎四一号窯のような六～七メートルの中型窯が登場する。八世紀前半の資料が少なく、標準的な規模は定かでない。

尾張ではこの頃、尾北（篠岡）窯（愛知県小牧市周辺）でも生産が始まり、猿投窯を凌ぐほどになる「城ヶ谷一九九三」。王権との関わりが強い「城ヶ谷一九九六」とされる尾北窯では二メートル余りの高蔵寺二・三号窯をはじめ大型窯が多く、宮都向けの豊富な器種組成の製品が焼かれた。猿投・尾北の窯構造は、この時期に列島を席卷した床面傾斜の緩い直立煙道窯を採用しないことに特徴がある。¹⁰古墳時代以来の細長い焼成部で直線的な床面傾斜の伝統を残しながら、燃焼部床面や焼成部口の改良などによって高品質生産の要請に応えた「北野二〇〇四」。築窯方式は地下式とみられるが概して浅い。

八世紀中葉～後半になると尾張では猿投窯に集約され、窯体長は六～八メートルで安定する。寸胴型の伝統をひき、焼成部口はやや絞りこむ。八世紀後半には奥壁が直立し、斜め煙道を設ける窯（鳴海二八六号

窯)がみられた。蓋杯は柱状の重ね焼きが発達し、同時に褐色の製品が目立つようになる。一方で、原始灰釉と呼ばれる壺瓶類が示すように、窯詰めや窯焚きの工夫により意図的に製品を焼き分けるようになった。付加価値の高い貯蔵具生産重視へ戦略を変えていった様子が見ええる。窯の半地下化・小型化は他の窯業地と同様に生産コストを考慮した結果であろう。八世紀末〜九世紀初頭には美濃須賀窯⁽¹⁾で発達した燃焼部が土坑状を呈する窯(鳴海二六五号窯、黒笹七号窯)がみられ、閉鎖的な猿投窯の技術に流動化が起っていた。

そして、九世紀前葉からは焼成部が寸胴形で最大幅が手前にある傾斜の緩い窯が登場する。燃焼部幅を広げ、入口は粘土柱によって前壁を支え、燃料を広く並べる方式がとられたとみられる。火前の壺瓶類等に自然釉・灰釉を効果的に溶かして焼くための工夫ではなかったか。九世紀前葉〜中葉には碗皿類が自然釉から人工施釉「尾野一九九八」へと発展し、灰釉陶器主体の生産へとなる。弘仁瓷器(『日本後紀』弘仁六年正月)、尾張産緑釉陶器の生産が始まったのもちょうどこの頃である。

尾張は八世紀中葉以降も伝統的な優品生産を継承しつつ、特産品のな壺瓶類を焼成し、九世紀には新様式食器の中核をなす灰釉陶器、緑釉陶器生産に移行して固有の焼物産地としての地位を築いていた。

それはさらに東海諸地域に拡大し、九世紀代には尾張尾北窯、美濃東濃(多治見)窯・関市北部窯、三河二川窯、遠江宮口・清ヶ谷窯で灰釉陶器生産が始まり、一〇世紀には駿河にも広がっていった。緑釉陶器も二川窯や東濃窯に拡散している。

(3) 越前・南加賀窯

南加賀窯(石川県小松市周辺)は五世紀末頃に開窯し、一〇世紀前半まで操業する。六世紀代は能登半島や東北南部にも製品が供給された日本海域の中核窯である。

南加賀窯は一貫して地下式構造である「望月一九九二」。六世紀後葉〜末には北部九州で発達した排煙口に溝が付設する大型窯を採用し、七世紀中葉〜後葉に中型の直立煙道窯に転換する。八世紀前半には八〜九メートルとやや大型化する。ところが他の窯業地と比べ、八世紀中葉〜後半の窯の小型化は顕著でない。窯構造は直立煙道窯の伝統を継承しつつ、床面傾斜の増加傾向がみられた。それに伴い床面には杯盤類半欠焼台が多用され、蓋杯類の柱状重ね焼きが始まる。同時に硬質に焼きしまったものが減少していく。南加賀窯の八世紀中葉〜後半の窯構造は、転換よりも継続性の側面が強い。その点は、戸津六〇号窯のような焼成部全体に甕等の大型品を置いている例や、加賀の消費遺跡でこの時期に大甕の急激な現象は認められないことも関連しよう。しかし、蓋杯の窯詰めや窯焚きの変化からすれば、緩やかながらコストを考慮した生産を志向したものと考えられる。九世紀前葉には焼成部床面傾斜が急で、窯尻開口の窯(戸津五号窯)が登場する。燃焼部は土坑状をなす。九世紀中葉からは焼成部床面傾斜が急になり、前半部が広く膨らみ、奥が先細りとなる(戸津二九号窯)。壺瓶類と杯・碗皿類の前後配置が確立したことが窺える。窯の傾斜を増すことは、蓄熱効果を高めただけ均一な製品を焼くことよりも、焼成室内の炎の引きを良くし、窯詰めの工夫により高温にさらされる火前的大型製品を焼きめることを目指したとみられる。

南加賀窯の窯構造は八世紀半ばの変化は明瞭ではない。理由のひとつは堅調な大甕生産が物語る在地社会の製品需要であろう。また急激な効率化を求めない社会経済状況があった可能性もある。陶器や猿投と同様に窯詰めや窯焚きの変化ははじまっていたものの、窯構造の変化が明確化するのには九世紀前葉〜中葉を待たねばならなかった。南加賀窯のこのような保守的な性格は窯場の動態にもあらわれる。北陸各地の窯場では八世紀中葉を境に、それまでの中核的な支群が生産を停止し、移動・拡

散する現象がみられた「北陸古代土器研一九九四」。その中で南加賀窯は目立つ変化を示さず、逆に八世紀末頃～九世紀前葉頃に戸津オオダニ地区への集約化の動きを示したのである。

(4) 小結

これまで検討してきたように列島の大規模窯業地では、いずれも八世紀中葉に何らかのかたちで生産の画期をむかえていた。七世紀後半から高まってきた大甕需要と製品の品質重視志向が相対的に弱まり、これに付随して生産者側が経済性を優先し、技術改良をはかつていった結果と解釈される。八世紀末～九世紀前葉の変化は、いずれもその延長上に起こった出来事とみることができる。

しかし、八世紀後半以降の対応のあり方は窯場によって異なっていた。生産の効率化が顕著で、九世紀に大甕や須恵器生産が衰退した牛頸窯と陶邑窯、生産の効率化をはかると同時に、貯蔵具等の優品生産を発展させ、食器も含めたブランド的価値を形成していった猿投窯、そして、緩やかに変容しつつも比較的順調な生産活動を展開した南加賀窯である。

このような生産地による顕著な戦略の違いを生み出した背景には、大消費地である都城とその出先機関、およびその近郊の都市社会を背景とする窯場、王権への貢納生産の伝統をひきつつ潜在的な技術力で付加価値の高い製品をうみだしていった窯場、豪族層による伝統的支配が色濃い地域社会を背景とする窯場など、それぞれ固有の政治・社会・経済事情があったものと推察される。三大須恵器窯業地と南加賀窯でみたそれぞれの戦略は、列島規模でどう位置付けられるのか。もうすこし広範囲に八世紀中葉の画期を追ってみたい。

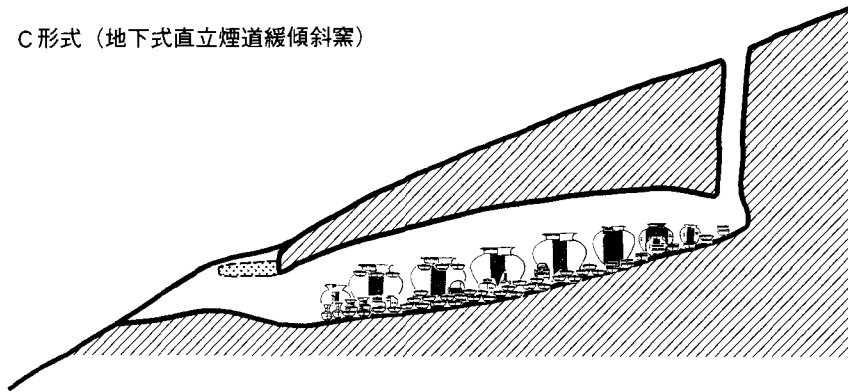
④ 列島各地の転換期窯業

ここでは列島東西の窯業地を広く概観し、窯構造の地域色をみていく。指標として取り上げるのは窯造りにおける天井構築方法である。地下式、半地下式（天井架構式）の二種の築窯方式は韓半島ではすでに四世紀代に存在し、陶邑の五世紀代は地下式志向とはいえ、半地下式も存在している（藤原一九九）。築窯方式と窯の規模は地質条件のほか、製品戦略（生産器種、窯焚き（焼き締め）、窯詰め）や技術伝統、経営規模などによって決定されたと考えられるが、窯の性能としていくつかの特性が指摘されている（窯跡研究会二〇〇五）。

窯の維持管理、すなわち窯体の改修や天井・壁の補修は一般に地下式は難しく、半地下式は易しい。熱の伝導性・蓄熱性・コストの関係は、周囲を厚く土で覆われた地下式では温まりにくく、冷めにくいのでコストはかかるが蓄熱性が良く、逆に空気に近い地上式では蓄熱性は良くないが、温まりやすい（冷めやすい）ので昇温コストは低いという特性をもつ。

藤原学氏は、韓国忠北三龍里・山水里窯跡での大型地下式窯と小型半地下式窯の使い分けや窖窯の一般的特性を踏まえ、焼き締めを強くするには、（コストはかかるが）地下式的大型窯が良く、しかし軟質でいいなら燃料効率からみても小型窯がふさわしい、とする（藤原二〇〇四）。また、大型窯では架設天井を維持するのが難しく、小型窯は天井が架設しやすいとし、八世紀以降の窯の小型化は、大甕生産の衰退や小型器種主体の生産がそれを促進していくことを指摘した（藤原二〇〇四）。この点は、筆者も先に五～一〇世紀の窯詰め方式や製品の焼き締めから、窯構造と製品戦略が列島規模で連動して変化していることを論じ、八世紀中葉を画期とする窯構造の変化について、生産コストという経済・技術面だけ

C形式（地下式直立煙道緩傾斜窯）



D形式（半地下式＝天井架構式窯）

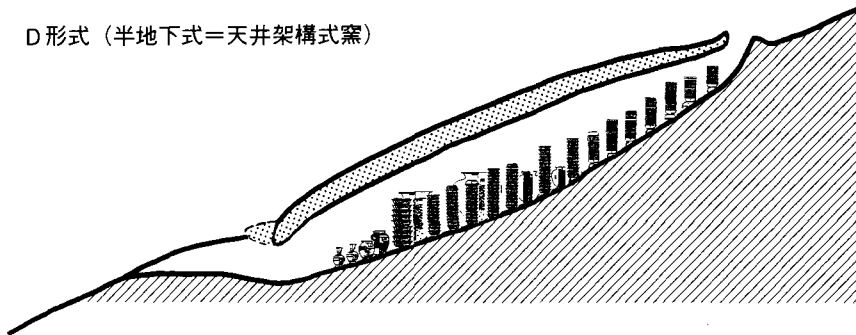


図6 転換期の窯構造と窯詰めモデル

でなく、西日本における大甕需要の衰退とそれをうながした伝統的在地共同体の解体、中品質食器類への転換など、消費者側の社会構造の変化、宗教・精神面からも評価したことがある〔北野二〇〇四〕。そして、この時期は地域窯業の多様性、すなわち製品戦略に列島の東西差や窯場毎の地域色が明瞭になることが興味深い。以下では各地の天井架構方式や窯の規模など主に技術面からこの点を検証してみたい。⁽¹²⁾

（1）九州

須恵器生産が盛んな九州島の北・西部、玄界灘から有明海・八代海に面する筑前・筑後・肥後では六世紀末～七世紀初頭に地下式大型窯を導入し、七世紀後半～八世紀前半には地下式直立煙道窯がみられた。これらの地域では、筑前の福岡県牛頸窯をはじめ、筑前東部窯跡群、筑後の八女窯跡群、肥後の荒尾窯跡群、球磨窯跡群など、八世紀後半以降もこの窯形式を継承し、さらに薩摩の岡野窯跡群にも用いられている〔石木二〇〇四a〕。窯の規模は概して小型である。肥後では九世紀初頭まで活発な須恵器生産を行っており、地域色豊かな長頸瓶や甕類を生産した。九世紀前半以降は小型食器の酸化焼成品の割合が増え、還元品は衰退していく。しかし、叩き成形の長胴瓶や大甕といった貯蔵具の生産は続き、福岡県牛頸石坂E二号窯や鹿児島県中岳山麓窯、宮崎県下村窯、佐賀県牧窯など九州各地に影響を与えている〔網田二〇〇三〕。

豊前では六世紀後半～七世紀前半に福岡県天観寺窯跡群のように地下式大型窯が用いられた。しかし、県境にある福岡県山田東窯跡や大分県伊藤田窯跡群では七世紀～八世紀前半に半地下式窯が築かれており、後述する四国瀬戸内地域との共通性が強い。豊後では八世紀後半の大部分松岡窯跡群が半地下式であり、日向でも九～一〇世紀の母田窯跡群や下村窯跡群が半地下式である。松岡窯跡群の調査された四基は窯体長が五～六メートル代で、畿内・瀬戸内でみられる典型的なD形式窯である。

大分県から宮崎県にかけての九州東部では半地下式窯の分布が顕著であり「石木二〇〇四a」、八世紀後半以降に須恵器生産が急速に衰退した形跡はない。

九州の東・南・西には牛頸窯や大宰府とは違って九世紀に入っても須恵器の生産・消費が比較的残存した社会があった。しかし、九世紀前葉以降は肥後でみたように長胴壺や甕類主体の生産に傾斜し、須恵器の小型食器を多数使用する古代前半期のあり方とは違いが明瞭となった。窯構造では西に牛頸窯と共通する地下式、東に瀬戸内地域と共通する半地下式の二つの技術圏が存在した。

(2) 中国地方(瀬戸内海側)

備前・備中・備後・安芸は七世紀から地下式窯が卓越し、備後・安芸では広島県御調窯跡群や高宮窯跡群(矢賀追窯跡群、明連窯)のように七世紀後葉から一〇世紀にかけて中・小型の地下式直立煙道窯が採用され、その後も地下式のまま中世窯へと展開していった「武田一九九九」。備前は延喜式調納国の一つであるが、その中核をなす東部の邑久窯跡群の窯構造の実態が不明である。焼成が八世紀後半からあまくなることが指摘「武田一九九九」されており、窯構造や製品戦略になんらかの変化があったことがうかがえる。西部では鐘鋳場窯跡群で九世紀に半地下式窯がみられた。備中では八世紀後半から須恵器生産が衰退する「武田一九九二」。防長の山口県陶窯跡群では八世紀前半に地下式直立煙道窯があり、八世紀半ばから窯の小型化、半地下式窯の採用がみられる「磯部二〇〇四」。日本海側では長門市末原窯跡群に九世紀前半の地下式直立煙道窯がある。

中国地方西部は八世紀後半以降も地下式窯が卓越する備後・安芸と、一部窯跡群で半地下式を選択した周防や備前西部、須恵器そのものが急速に衰退していった備中、貢納品生産地であり九世紀以降も生産を継続した備前東部など、複雑な地域様相を示している。

(3) 四国

讃岐・伊予・阿波・土佐とも八世紀後半以降、半地下式窯が卓越する。讃岐は延喜式貢納国であり、藤原宮造宮瓦を焼いた宗吉瓦窯が存在する。讃岐の七世紀〜八世紀初頭の窯は地下式であったが、八世紀前葉から国衙に近い十瓶山窯に生産地の一元化がはじまり、そこでは半地下式窯が採用された「佐藤一九九九」。以後、四国最大の窯場として九世紀後葉から一〇世紀前葉に生産規模を拡大、小型有床式や煙管式という食器類に特化した新式小型窯を導入し、甕壺用の窖窯との併用が行われた。八世紀後半の窯の小型化は不明瞭で、九世紀にも前代の伝統を残す「池澤二〇〇四b」。播磨にくらべ地上化が顕著でない点や比較的規模の大きな窯があるのは甕生産との関係を考慮する必要がある。

伊予では砥部窯跡群など、六世紀末から七世紀後半まで半地下式窯が主体をしめ、八世紀後半の千足一号窯ではD形式窯がみられた。阿波や土佐も調査例は少ないが、八世紀後半以降、半地下式窯の存在が知られる「池澤二〇〇四b」。ただし、土佐では九世紀に入ると須恵器は減少し、後半には見られなくなる「池澤二〇〇四a」。

四国の瀬戸内側は七世紀後半〜八世紀前半の地下式直立煙道窯の採用が不明確で、代わりに半地下式窯が古くから用いられた。八世紀後半以降も半地下式窯による須恵器生産が活発で、後述する播磨と共通した動きをみせている。

(4) 近畿西部

東摂津は六世紀から七世紀まで一貫して半地下式窯であった「藤原はか一九九九」。その要因には脆弱な基盤層をなす地質的要因が指摘されている。西摂津では六世紀末〜七世紀初頭に地下式大型窯(三田市平方三号窯)が一時存在したが、すぐに半地下式(同一・二号窯)に転換し、

その後、半地下式窯が一般化した「藤原ほか一九九、森内ほか二〇〇四」。

播磨では七世紀から一貫して半地下式窯が築かれ、八世紀後半には寸胴形から燃焼部に最大幅をもつ形式が出現した「牛谷一九九、森内ほか二〇〇四」。窯体の小型化は顕著でなく、規模や窯数からは活発な須恵器生産を窺うことができる。この点は讃岐と類似する。しかし、燃焼部口の大いD形式窯や九世紀からの地上窯への傾斜「森内二〇〇四」は、陶器窯でみた動きにも通じ、小型品主力生産において燃焼効率を追及した結果と推察される。志方窯など、播磨の製品は精良な胎土で成形のシャープな優品が多く作られた。

淡路でも七世紀後葉に半地下式窯が存在する。陶器窯も含めた瀬戸内東部・九州東部には七世紀代から半地下式窯を共有する技術圏があり、それは八世紀後半以降にも基本的には引き継がれた。しかし、その頃を画期として、須恵器生産が衰退した和泉や備中、土佐などに対して、生産技術を変容させながら発展していった播磨や讃岐、といった地域色が明瞭となった。ただし、九世紀後半・末頃になると食器は軟質・白色化しており、土師器と対で用いられた古代前半期のそれとはやや性格を異にしていたと考えられる。

(5) 北陸から東北日本海側

北陸では越前・加賀・越中で六世紀末・七世紀初頭に地下式の排煙部溝持ち大型窯が出現した「望月一九九三」。そして、七世紀後半からは越前・越後、信濃北部（北信）まで広く地下式直立煙道窯が採用された。その中で越中の射水窯が七世紀前半から、越後や北信でも八世紀初頭・前葉には半地下式に転換するなど、北陸北東部では半地下式への動きが早かった。射水窯では直立煙道窯を受け入れている。

北陸南西部では南加賀窯を除き、やや遅れて半地下式に移行した。越前の動向は不明確ながら、王子保窯で八世紀前半に半地下式窯が確認で

きる。加賀の能美窯では八世紀末から、末窯では八世紀後半から、能登の高松・鳥屋窯では八世紀中葉から後葉に半地下式に転換する。北陸の須恵器生産は八世紀後半から九世紀初頭に衰退することなく、活発化し、大甕生産も継続する。それを反映してか、射水窯（小杉町流団No.一八窯）を除き、窯構造の変化は比較的緩やかで、小型化と床面傾斜の増加は漸移的である。

東北日本海側の出羽（庄内・秋田）では八世紀後半に窯場が成立した。山形県では内陸の置賜で七世紀後葉・八世紀初頭に地下式直立煙道窯が存在したが、八世紀後半からはすべて半地下式となる。村山の平野山窯跡群では九世紀に入ると杯類の焼成があまりなる傾向がある。秋田県でも内陸で八世紀中葉・後半の竹原窯S-J〇五fを除き、半地下式窯が用いられた。九世紀後葉になって成立した列島北端の津軽五所川原窯も半地下式で寸胴ないしは燃焼部幅の広い特徴をもつ。その平面形態は佐渡の小泊窯や出羽沿岸部の窯と共通性がみられた。なお、九世紀中葉に成立した小泊窯は越後のみならず、出羽庄内や越中の一部にも供給しており、海上交通の発達と新たな経済圏への成長が窺える。

北陸以北の日本海側は八世紀前半から後半にかけて、須恵器生産を発展させながら半地下式の技術圏を形成していった。その広範な共通性と、一貫して地下式の伝統を保った南加賀窯の独自性は自然的要因だけでは説明できないだろう。

(6) 関東

武蔵の南比企窯・南多摩窯や常陸の木葉下窯では七世紀末・八世紀前半に地下式直立煙道窯が採用された。常陸の諸窯では八世紀後半以降もその伝統を引き継ぐ。南比企窯は七世紀中葉に舞台窯のような半地下式がみられたが、地下式の伝統を根強く継承した。しかし武蔵の四大窯跡群ではその後、時期差をもちつつ九世紀前葉・末に半地下式窯に転換し

ていく。八世紀後半での窯の小型化は不明瞭で、顕著となるのは九世紀後半からである。

上野は地下式直立煙道窯が卓越する地域である。東毛の舞台・光仙坊窯では八世紀末～九世紀前半に平地式の小型地下式窯が築かれた。同じ頃、西毛の秋間窯二反田遺跡でも小型地下式の直立煙道窯が築かれ、主に小型の食器が焼かれた。このような小規模窯を連続的に作り変えることによってリスクを抑える操業形態の登場は、この頃の生産戦略に大きな変化があったことをうかがわせている。甕等を焼く中型窯との併用は地形的条件を踏まえ、品質よりも生産性を重視した結果であろう。上野から武蔵にかけて展開する小型窯の燃焼部には石を用いる例が多い。上野北部の月夜野窯で八世紀後半に小型の半地下式窯が築かれている。下野では八世紀後半の宇都宮窯、九世紀以降の益子窯や岡窯に半地下式窯がある。

上野と対照的なのが、上総である。八世紀前葉には地下式窯があったが、八世紀後半には南河原坂窯や永田不入窯で半地下式窯が出現し、九世紀初頭には統一される「倉田ほか二〇〇四」。南河原坂窯の細長い斜め煙道は猿投窯との関係も示唆するが、むしろ独自色の強いものだろう。八世紀末～九世紀前半には石川窯や下総の吉川窯でも半地下式窯がみられた。

関東では須恵器生産が八世紀後半に衰退した形跡はあまり無い。築窯方式の選択性では、常陸や上野、武蔵で地下式の伝統が強く、上総・下総は半地下式を積極的に取り入れていた。上野は八世紀末頃から生産効率の良い経営形態がいちはやく登場し、窖窯適地となる丘陵を有していた武蔵でも、九世紀に入ると半地下式の採用が始まり、後半～末に小型化が進行していった。

(7) 東北太平洋側

陸奥では七世紀中葉～八世紀前葉に各地で直立煙道窯が採用された。宮城県須衛窯や春日大沢窯跡群では八世紀後半から半地下式窯が利用された。福島県浜通りの相馬・いわきでは地下式の伝統が強かったが、九世紀末には猪倉B二号窯や折木窯など小型の半地下式窯が登場する。中通りでは八世紀中葉の広網遺跡で平地に小型の地下式窯が築かれた。八世紀後半になると半地下式の瓦窯が多数作られ、大久保A遺跡の須恵器窯でも採用されている。会津では萩の窪窯の九世紀前半、大戸窯は最終段階の九世紀後葉～末に半地下式窯がみられる。岩手県瀬谷子窯跡は成立期の九世紀前半から一〇世紀初頭にかけて半地下式窯が使われた。

東北太平洋側では遅速はあるが、大きくみれば八世紀後半に地下式から半地下式へ転換していく地域であり、その中であって浜通りの諸窯と会津大戸窯が地下式の伝統の強い地域といえる。須衛窯では九世紀後半から一部地下式となるがこれは窯の小型化・急傾斜化に対応したものであろう。陸奥でも出羽と同様に八世紀後半に須恵器窯は数を増し、生産は活発化したことがうかがえる。杯類の柱状重ね焼きは八世紀後葉には始まっており、半地下式の採用とあわせた経済性志向は看取できる。生産の衰退が顕著となるのは九世紀末～一〇世紀のことであろう。

(8) 小結

ここではすべての地域を取り上げたわけではないが、列島の須恵器窯業が八世紀後半に共通した動きをみせていることは間違いない。それは八世紀前半に比べ経済性を優先するという生産戦略と考えられる。ただし、その技術的対応は地域や個々の窯場で多様なあり方をみせ、窯構造や窯詰め、窯焚きの変化からは達成度にも差が認められる。

築窯形態では、東部瀬戸内海と東九州での半地下式窯の卓越や、やや

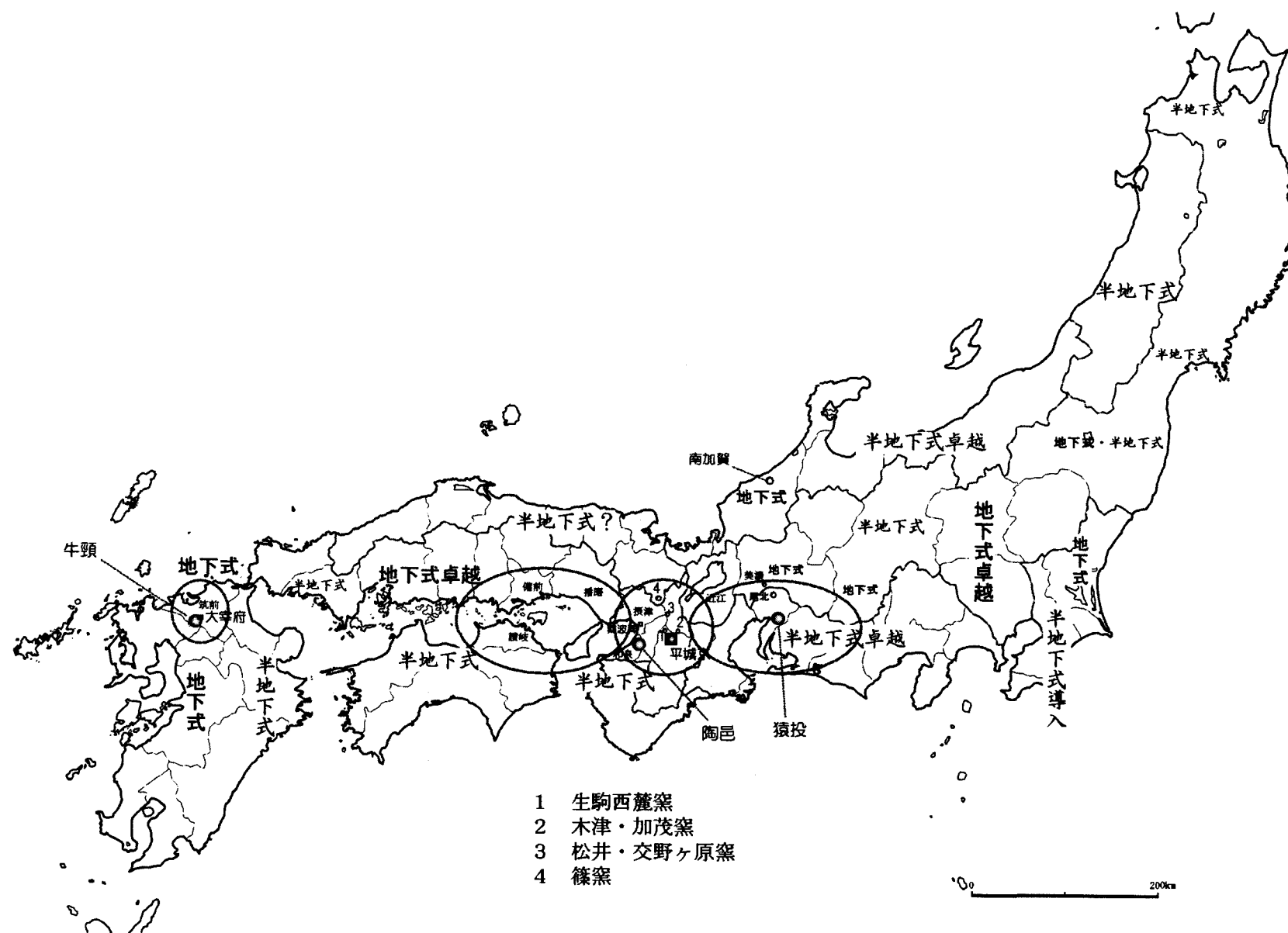


図7 転換期窯業の築窯方式と技術圏・土器消費圏

時期は下るが佐渡から庄内、秋田、津軽といった北東日本海沿岸部の類似性が注目される。前者はすでに七世紀代の築窯形態に遡るが、八世紀後半～九世紀に海を媒介にしたより広域の技術圏が形成されていくかのようである。その背景には難波方面からの海上交通による窯業製品の大量流入、すなわち讃岐や播磨、備前産須恵器「川越ほか一九九九」、下川津遺跡などの讃岐産土師器の平城宮への輸送という流通経済の発達「松原二〇〇〇」を契機とした相互の情報交換・技術交流があったものと考えられる。

須恵器生産はほとんどの地域で九世紀前半まで伝統的な形で維持されたが、その後の展開は大きく分かれることとなった。一つは須恵器生産からいち早く離脱していった都城や大宰府周辺の窯場であり、背後には国産・輸入陶磁器を含む多様な焼物複合をもった都市的、貴族的社会があった。

もう一つは、播磨や讃岐のように器種を小型食器と特定の貯蔵・調理具に集約し、地上式窯を採用したり、小型窯で食器を焼き分けるなど、一〇世紀以降も生産を継続していった窯場である。都市的な経済圏、瀬戸内海海運など流通経済の発達した環境が背後にあつて成立しえたものとみられる。また、中～南九州は食器生産のあり方は異なるが、須恵器が特定の貯蔵具に収斂していく点は共通する。これらは西日本の須恵器系中世陶器窯が成立する世界にほかならない。須恵器が焼物としての実用的機能を高める方向に進んでいったといえる。

尾張を含む美濃、三河など東海地域は、灰釉・緑釉陶器生産を発展させ、九世紀の新たな土器様式成立に重要な位置を占めた。古代末～中世には瓷器系陶器の一大産地が成立した。

さらにもう一つは、北陸や関東、東北でみたように、九世紀後半～末まで小型食器や甕類を含む須恵器生産が根強く残った地域である。それらにあつても生産コストを下げようとする努力は随所にみえた。関東で

八世紀後半～末に大型、小型窯による分業的生産が志向されたのもその一例であろう。また、長胴瓶や甕類など特定器種への生産の偏りも認められた「北野一九九九」。

おわりに——転換期窯業の歴史的意義——

ここまで律令国家転換期の列島各地の窯業を俯瞰してきた。最後に本稿で述べてきたことをまとめ、窯場と須恵器使用の現場で起こった変化の背景について、主に経済や宗教の側面から解釈を試みむすびにかえたい。

七～九世紀の土器様式は概ね三大別され、八世紀後半～九世紀初頭・前葉が前後の様式の転換期と理解された。このような大別様式の把握は各地の土器編年に共通してみられ、その背後には列島規模の広範な政治、経済、社会、宗教情勢が反映したとみられる。

都城周辺の窯業地では八世紀中葉に陶器窯と都市近郊窯の盛衰が入れ替わった。平城宮でも八世紀前半代は陶器産が大半をしめたのに対し、八世紀後半には減少、代わって近郊窯の生駒西麓産や貯蔵具の優品を含む尾張産が増加した。八世紀後半に築かれた畿内中枢部の窖窯は半地下式で、焼成器種の変化（大甕の減少、小型品の増加）に対応した窯構造を採用し、効率的な窯詰めと燃焼コストをおさえた生産が行われた。

ところで調庸税制は当初から中央市での交易のような流通経済の仕組みを必要とし、その発達を促す側面を持っていたが、八世紀中葉からその収取・運用に流通経済の果たす役割が大きくなっていったとされる「栄原一九七三」。宮都における須恵器の調達も一部の実物貢納品を除けば、基本的には他の物資と同様に交易システムが利用されたとみられる。重貨である須恵器の運京は窯業経営者（地方豪族層）にとつては負担の大きいものであつただろう。生産の場における様々なコスト削減は、国府

交易圏や中央交易圏と直接関わりながら、手工業生産による私富獲得活動を展開した彼らにとって当時の経済状況の中では必然的選択だったといえる。生駒西麓窯など都市近郊窯が陶邑窯より有利なのは流通面である。陶邑産が規模を縮小していく背景に「陶山相論」(『三代実録』貞観元年)等を根拠に森林枯渇等の自然的要因を想定する考え(檜崎一九六五)もあるが、少ない八世紀の樹種同定例「西田一九七八」や古代の一般的建築戦略「藤原一九九三、山口ほか一九九〇」からすると、必ずしも経営を圧迫するような広範な森林破壊があったとは評価しづらい。陶邑が総体として生産規模を縮小していくのは経営集団の社会構造「田中一九六七」や流通経済に主因があったとみたほうがよからう。

陶邑産須恵器貢納が律令制下においても国家儀礼・祭祀用陶器提供という服属儀礼的な意味あいを持っていたとすれば、その実質的撤退は形式的であれ王権の強化がはかられたと評価することができる。宮都周辺での大甕生産の衰退が、これを重用する国家儀礼(神事)や関連祭祀の簡略化、あるいは畿内在地社会の祭祀の変容を背景としたかは判断できないにしても、八世紀中葉以降の鎮護国家の仏教政策が間接的に窯業生産にも影響を与えた可能性は十分想定しうる。

また、八世紀末頃に鮮明となる成形技法の簡略化や重ね焼きによる軟質化・白色化は現代からみれば品質低下とも受け取れるが、それ以前から消費者側に必要以上の品質(作りの良さ・硬さ・色)より価格を重視するような社会的コンセンサスが得られていれば、そのような製品であっても十分受け入れられただろう。八世紀末に布など調庸物の匱乏が問題となるような地方の手工業生産技術の停滞と経済状況が、物によっては八世紀中葉から始まっていたのではないか。

一方、地方の須恵器窯業もまた八世紀中葉に経済性を志向するような生産の画期が認められた。これは在地の手工業生産と流通経済が国のそれを規定し、さらに中央経済をも規定していくという関係(栗原一九七三)

においては必然的とも言える。

八世紀後半～九世紀前半の生産戦略を大きく分けると、①畿内中枢部と類似した牛頸窯と大宰府、②猿投窯とその周辺、③讃岐・播磨、④北陸・関東・東北の四つの類型があった。これらは古代末から中世の焼物生産・消費の文化圏をも表しており、八世紀中葉の須恵器生産の画期が中世的焼物世界形成の端緒となった「宇野一九八四」ことを物語っている。

②④地域やその内部ではそれぞれの固有の社会的、経済的、宗教的事情により須恵器生産に対応の違いが生じたはずである。一例として北陸の越前(加賀)・越中地域を取り上げてみよう。北陸では八世紀中葉から中央王臣家や官大寺の初期荘園の占定、在地豪族の墾田開発など農業活動が活発化していた。豪族層は手工業生産を含む従来の私的経営に加え、中央経済圏とも直結する新たな農業経営に関わることでさらなる利益を獲得したであろう。彼らが民衆を徴発して行う農業・土木・運送等の経済活動には共同飲食や儀礼がつきもので、須恵器大甕や給食用食器類の需要は高かった。また、密度濃く分布する山間寺院でもその宗教活動に多量の須恵器が消費された。北陸では八世紀後半においても窯場数や窯数がピークを保ち「宇野一九九二」、生産量が最大となったのは、その経営者たる在地豪族層が如上のような農業経営や宗教活動に「須恵器」を必要とした社会であったからにはほかならない「北野一九九六」。この場合の須恵器は単に実用の器としてだけあったのではなく、共同体祭祀や支配関係の確認といった古墳時代以来の象徴的機能や伝統的使用形態をあわせもつ道具だったのではないか。

東海地域が窯業地としてのあらたな飛躍をとげたのは、猿投窯や美濃須恵窯、湖西窯など、各国の中核窯が個性的でありながら相互に技術交流を持ち、優品生産の伝統を保持する広域の技術圏を形成していたこと、そして、その背後には地域経済圏とともに、古墳時代以来の東国への流通圏「埼玉考古学会二〇〇六」をもっていたことが重要な要因になったと

考えられる。

八世紀中葉は七世紀からの土器様式の帰結点であり、九世紀以降のそのの出発点であった。聖武朝に比定されるこの段階が律令国家にとって文化のあらゆる側面（制度・物質・宗教）でターニングポイントとなったことはつとに指摘されてきたことである。本稿は主に須恵器窯業の技術や流通といった経済面からこのことを検討し、それを追認した格好となった。

論じ残した課題は多いが、畿内をはじめ各地の窯業生産の変容を、経営側・消費者側双方の集落・共同体における社会構造や分業体制の視点からさらに考察する必要がある。また本来なら、長岡京・平安京遷都期（八世紀後葉～九世紀前葉）の窯業の動向を詳細に検討するのが役割であったように思うが十分果たせなかった。

註

- (1) 畿内と東国の土器生産から分業の問題を論じたものとして田中一九六七、西日本を対象とし、土器様式と製作技術から転換期窯業の流通や分業を論じたものとして巽一九八三、畿内から列島全体を視野におき、古代食器様式の変遷とその意義を多面的に論じたものとして宇野一九八五があげられる。地域論は、北陸では北陸古代土器研究会一九九四、関東では埼玉考古学会二〇〇六などが参考となる。
- (2) 量産型施釉陶器の生産開始や新たな意匠の出現を重視する場合、九世紀初頭を画期とする。
- (3) 例えば、列島規模（畿内中心）の食器様式「宇野一九八五」、太宰府「中島二〇〇五」、加賀「田嶋一九八八」、備前「武田一九九二」、尾張須賀「尾野二〇〇〇」、などがある。
- (4) 窯場は七世紀中葉に梅地区に集中する傾向がみられ、八世紀前半はこれにTK地区が加わったが、八世紀中葉には両者は衰退し、代わってKM地区が増えた「重見二〇〇一」。
- (5) 宇野隆夫氏は古代前期の須恵器生産の特色の一つは、燃料の消費や失敗品の増加をいとわず、ほとんどすべての製品を堅緻に、還元焼成することにあつたとする「宇野一九九一」。

- (6) 四国瀬戸内側の伊予（千足一号窯）や、良好な調査例に恵まれない讃岐（十瓶山窯）でもD形式の採用があつたとみられる。

- (7) 陶器で採用されたIIb型の積み重ね「北野一九八八」は、平城宮出土土器ではすでに八世紀前半にみられるが、八世紀中葉以降に一般化する。このタイプは蓋の内外面を降灰からふせぐ利点があり、大型品が先行して採用する傾向があることから都城向けの供給と関連があるかもしれない。IIa型は蓋の天井に膨らみがあるほうが安定するが、IIb型は逆に蓋同士の安定のために扁平化（特に口縁部）が必要となる。八世紀後半にIIb型が発達する陶器や生駒産の扁平化な杯蓋と、IIa型の猿投窯産などと器形の大きな違いはこのような窯詰技術との関わりからも説明できる。八世紀中葉の京都府西桐窯では法量と器形により両者の使い分けが認められる。

- (8) 重見泰氏によれば、陶器窯では食膳具が八世紀前半は八割前後であつたものが、後半（長岡京期）には九割以上を占めるようになるという「重見二〇〇二」。八世紀前半に一割前後みられた甕類など貯蔵具が相対的に減って食膳具率が増加している。九世紀前半には逆に食膳具が二割前後に減少する。篠窯でも八世紀後半～九世紀初頭の甕類は比率にならないほど少ない「財団法人京都府埋文一九八四・一九八九「篠窯跡群」I・II」。長岡京でも甕類の割合は宮・京とも須恵器中の一割以下である「秋山一九九二a」。

- 「大甕」は一般には七世紀に発達した口縁部別作りで装飾性のある大容量の甕をさす。七世紀後葉～八世紀には中央・地方ともさまざまな儀礼の場面で使用されたとみられるが、その後は装飾や口縁部形態を変化させており、当初の象徴的な意味合いが薄れていったことがうかがえる。現状では延喜式の祭具の古器名と甕の作り分けとの対応は不明であり、九世紀代の甕の形態や法量変化と、甕の儀礼的機能の相対的低下、数の減少との関係はよくわかっていない。

- (9) 平城Vの馬寮東方地区SK五二八三では陶器産に比定される須恵器が高い割合を示す「川越ほか一九九九」。一方、同時期の兵部省の遺構では猿投産が目立つ（川越俊一氏御教示）。前者では同一産地類似器形の製品（杯蓋）がまとまって出土しており、収取方法次第では遺構により産地の偏りが出る可能性がある。

- (10) ただし、七世紀末～八世紀前半の中型窯（岩崎四一号窯、潮見坂四号窯）の出現は、直立煙道窯とおなじように品質安定への志向、あるいは焼き分けと何らかの関係がある可能性がある。

- (11) 美濃須賀窯は八世紀中葉から土坑状燃焼部をもつ特徴的な窯（地下式）に転換する。急激に絞り込んだ入口の奥を大きく開き、奥にいくにしたがつてすばまる焼成部の平面形態はD形式窯と共通する。各務原市天狗谷七号窯でみられたように貯蔵具類を火前に置く効率的な窯詰め・窯焚きを行うための改良と評価できる。

(12) 本章で引用する各窯の資料は「窯跡研究会一九九九年」および「同二〇〇四」の文献による。

(13) 姫路市御坊山一号窯は七世紀後葉の(地下式)直立煙道緩傾斜窯とみられる。

参考文献

- 秋山浩三一九九二a「長岡京の土器―土器組成からみた宮域の特質―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東―』古代の土器研究会
- 秋山浩三一九九二b「長岡京土器の蛍光X線分析と産地推定」『長岡京古文化論叢』II
- 中山修「先生喜寿記念事業会編
- 浅香年木一九七一「平安期の窯業生産をめぐる諸問題」『日本古代手工業生産史の研究』法政大学出版局
- 網田龍生二〇〇三「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究』IV(考古学研究室創設三〇周年記念論文集) 龍田考古会
- 生駒市教育委員会一九八八「生駒市遺跡分布調査概報」生駒市文化財調査報告書第七集
- 池澤俊幸二〇〇四a「中国・四国地域の古代後半期須恵器窯」『須恵器窯の技術系譜二―八世紀中頃―』二世紀を中心として―発表要旨集 窯跡研究会
- 池澤俊幸二〇〇四b「讃岐の須恵器窯・土器窯」『土佐の須恵器窯』『阿波の須恵器窯・土器窯』『須恵器窯構造資料集二―八世紀中頃から二世紀を中心として―』窯跡研究会
- 池辺元明ほか一九八八「牛頭窯跡群」I 福岡県教育委員会
- 石井清司一九八三「篠窯跡群出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第七号
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 石井清司一九八九「篠窯跡群にみる三つの画期」『篠窯跡群』II 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 石本秀啓二〇〇四a「九州地域の古代後半期須恵器窯構造」『須恵器窯の技術と系譜二―八世紀中葉から二世紀を中心として―』発表要旨集 窯跡研究会
- 石本秀啓二〇〇四b「筑前」『須恵器窯構造資料集二―八世紀中頃から二世紀を中心として―』窯跡研究会
- 磯部貴文二〇〇四「長門・周防の須恵器窯」『須恵器窯の技術と系譜二―八世紀中葉から二世紀を中心として―』発表要旨集 窯跡研究会
- 牛谷好伸一九九九「播磨の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集―出現期から八世紀中頃を中心として―』窯跡研究会
- 宇野隆夫一九八五「古代の食器の変化と特質」『日本史研究』第二八〇号 日本史研究会(一九八九「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」真陽社 所収)
- 宇野隆夫一九九一「律令社会の考古学的研究―北陸を舞台として―」桂書房
- 宇野隆夫一九八四「後半期の須恵器」『史林』第六七巻第六号(一九八九「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」真陽社 所収)
- 江谷寛一九八二「松井窯跡群」『田辺町遺跡分布調査概報』田辺町教育委員会
- 尾野善裕一九九八「灰釉陶器生産技術の系譜」『榑崎彰一先生古希記念論文集』榑崎彰一先生古希記念論文集刊行会
- 尾野善裕二〇〇〇「猿投窯(系) 須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅(発表要旨)』東海土器研究会
- 窯跡研究会一九九九年a「須恵器窯の技術と系譜―豊科、信濃、そして日本列島―発表要旨集」
- 窯跡研究会一九九九年b「須恵器窯構造資料集―出現期から八世紀中頃を中心として―」
- 窯跡研究会二〇〇四a「須恵器窯の技術と系譜二―八世紀中頃から二世紀を中心として―」発表要旨集
- 窯跡研究会二〇〇四b「須恵器窯構造資料集二―八世紀中頃から二世紀を中心として―」
- 窯跡研究会二〇〇五「第三回窯跡研究会シンポジウムの討論記録」『窯跡研究』創刊号
- 加茂町教育委員会一九八一「西瀬窯跡」
- 川越俊一・玉田芳秀一九九九「馬寮東方地区の調査」第二九八次「奈良国立文化財研究所年報」一九九九―III
- 北野博司一九八八「重ね焼きの観察」『辰口西部遺跡群』I 石川県立埋蔵文化財センター
- 北野博司一九九六「初期荘園と土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第七集
- 北野博司一九九九「貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究』第八号 北陸古代土器研究会
- 北野博司二〇〇一「須恵器製作技法研究の現状と課題」『古代の土器 律令的土器様式の西・東六 須恵器の製作技法とその転換』古代の土器研究会
- 北野博司ほか二〇〇二「須恵器の成形におけるロクロ回転」『日本考古学協会第六八回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 北野博司二〇〇四「遷りゆく窯」『須恵器窯の技術と系譜二―発表要旨集 窯跡研究会』
- 倉田義広・小林信二二〇〇四「上総の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集二―八世紀中頃から二世紀を中心として―』窯跡研究会
- 小森俊寛一九九四「概説」『古代の土器三 都城の土器集成』III 古代の土器研究会

小森俊寛二〇〇五『京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、七—一九世紀—』京都編集工房

埼玉考古学会二〇〇六『埼玉考古学会五〇周年記念シンポジウム 古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』（埼玉考古）別冊九

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター一九八四・一九八九『篠塚跡群』Ⅰ・Ⅱ
栄原永遠男一九七三『律令制下における流通経済の歴史的特質—律令制収奪と関連して—』『日本史研究』第一三二号（一九九二）奈良時代流通経済史の研究』塙書房所収

佐藤竜馬一九九九『中国・四国の須恵器窯—須恵器窯の技術と系譜—豊科、信濃、そして日本列島—発表要旨集』窯跡研究会

重見泰二〇〇二『律令時代の須恵器生産—生駒古窯跡群からみた宮都の発展と須恵器生産—』『古代学研究』一五六・一五七号 古代学研究会

白石耕治一九九九『和泉陶邑の須恵器窯—須恵器窯の技術と系譜—発表要旨集 窯跡研究会

城ヶ谷和広一九九三『尾張猿投窯と尾北窯—年報 平成四年度—愛知県埋蔵文化財センター』

城ヶ谷和広一九九六『律令体制の形成と須恵器生産—瓦陶兼業窯の展開—』『日本考古学』三 日本考古学協会

城ヶ谷和広二〇〇五『猿投窯における須恵器生産の変革期について—岩崎四一窯出土須恵器の検討から—』『愛知県史研究』第九号

関根貞隆一九六九『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館

高橋照彦一九九二『山背における古代窯業生産—岩倉窯跡群—京都大学考古学研究会
高橋照彦一九九九『律令的土器様式—再考—』『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会

武田恭彰一九九二『瀬戸内の土器—岡山県下の古代土器様相を中心に—』『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東—』古代の土器研究会

武田恭彰一九九九『山陽の須恵器窯—備前・備中・備後・安芸—』『須恵器窯構造資料集—出現期から八世紀中頃を中心にして—』窯跡研究会

巽淳一郎一九八三『古代窯業の生産と展開—西日本を中心として—』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立三〇周年記念論文集 同朋社

巽淳一郎一九八九『古代の窯業—古代史復元』九（古代の都と村）講談社

巽淳一郎一九九一『a「都の焼物の特質とその変容」『新版古代の日本』第六巻近畿Ⅱ
角川書店
巽淳一郎一九九一b「二土器」『平城宮発掘調査報告』XⅢ 奈良国立文化財研究所
巽淳一郎一九九五『奈良時代の越・邇・止・由加—大型貯蔵用須恵器の器名考証—』『文

化財論叢』Ⅱ（奈良国立文化財研究所創立四〇周年記念論文集）同朋舎出版
巽淳一郎一九九九『古代の焼物調納制に関する研究—『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会

田中琢一九六四『須恵器製作技術の再検討—考古学研究』第一二巻第二号 考古学研究会

田中琢一九六七『畿内と東国—古代土器生産の観点から—』『日本史研究』第九〇号 日本史研究会
田辺昭三一九六六『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園考古学クラブ
田辺昭三一九八一『須恵器大成』角川書店

玉田芳英一九九二『平城宮の土器—古代の土器研究—律令的土器様式の西・東—』古代の土器研究会

中島恒次郎二〇〇五『聖武朝の土器—九州（大宰府と周辺）—』『古代の土器研究 聖武朝の土器様式—古代の土器研究会
中村浩一八九九『牛頭ハセムシ窯跡群』Ⅱ 大野城市教育委員会

西弘海一九七六『土器—平城宮発掘調査報告—』Ⅶ 奈良国立文化財研究所（一九八六『土器様式の成立とその背景—真陽社 所収—』

西弘海一九八二『土器様式の成立とその背景—考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集 平凡社（一九八六『土器様式の成立とその背景—真陽社 所収—』

西田正規一九七八『須恵器生産の燃料について—陶邑—』Ⅲ 大阪府教育委員会
野上丈助一九八〇『調査経過—陶邑—』Ⅴ 大阪府教育委員会

坂野和信一九七九『日本古代施釉陶器の再検討（Ⅰ）—』『考古学雑誌』第六五巻第二号 日本考古学会

菱田哲郎二〇〇四『古墳時代の中・後期の手工業生産と王権—文化の多様性と比較考古学—』考古学研究会五〇周年記念論文集 考古学研究会

平尾政幸一九九二『平安宮・京の土器・陶磁器—古代の土器研究—律令的土器様式の西・東—』古代の土器研究会

藤原学一九九三『須恵器窯と燃料薪—考古学論叢—』関西大学考古学研究室開設四〇周年記念 関西大学

藤原学一九九九『須恵器窯の構造と系譜—その技術と源流—』『須恵器窯の技術と系譜—豊科、信濃、そして日本列島—発表要旨集』窯跡研究会

藤原学・西本安秀一九九九『摂津の須恵器窯—須恵器窯構造資料集—出現期から八世紀中頃を中心にして—』窯跡研究会

北陸古代土器研究会一九九四『北陸古代土器研究（特集：須恵器生産における八世紀中葉の画期）』第四号

松原弘宣二〇〇〇「八世紀における瀬戸内海運漕の諸様相」『続日本紀研究』三三七続
日本紀研究会

望月精司一九九一「須恵器窯体構造の変遷」『戸津古窯跡群』Ⅰ 小松市教育委員会

望月精司一九九三「須恵器窯構造から見た七世紀の画期」特に南加賀窯古窯跡の様相
を中心として」『北陸古代土器研究』第三号 北陸古代土器研究会

森明彦一九九四「陶器・ミツキ・大嘗祭」『大阪の歴史と文化』井上薫編 和泉書院

森明彦一九九七「土器の収取とその用途」『古代交通史研究』第六号 古代交通史研究
会

森内秀造二〇〇四「関西地域の古代後半期の須恵器窯構造」『須恵器窯構造資料集二』

八世紀中頃から一二世紀を中心として」『発表要旨集』窯跡研究会

森内秀造・北実生・寺田麻子二〇〇四「西摂津の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集二』

八世紀中頃から一二世紀を中心として」窯跡研究会

森内秀造・木村理恵二〇〇四「播磨の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集二』八世紀中頃
から一二世紀を中心として」窯跡研究会

八幡市教育委員会一九七九「交野ヶ原古窯跡」

山口慶一・千野裕道一九九〇「マツ林の形成および窯業へのマツ材の導入について」

『研究論集』Ⅷ 東京都埋蔵文化財センター

本稿は歴博の共同研究「律令国家転換期の王権と都市」の研究会（二〇〇三・六・八）、および窯跡研究会シンポジウム「須恵器窯の技術と系譜二」（二〇〇四・六・一二）・研究例会（二〇〇五・一・二九）で口頭発表した内容をもとにしている。各研究会の出席者の方々から有益な御教示を賜った。感謝申し上げます。

（東北芸術工科大学、国立歴史民俗博物館共同研究協力者）

（二〇〇六年五月三十一日受理、二〇〇六年八月一〇日審査終了）

The Sue Ware Industry during the Transitional Period of the Ritsuryo State

KITANO Hiroshi

This paper discusses changes in Sue ware production during the transitional period of the Ritsuryo state (late 8th century through early 9th century) by examining background economic, social and religious factors. Its scope extends to the entire Japanese archipelago, and it examines the rise and fall, kiln techniques (kiln structure, filling and firing), and types of ware produced for each kiln while including regional characteristics.

There was a marked decline in Suemura kilns in the environs of the walled capital city, which was a major location of kilns in Japan. They were replaced by active production by kilns in outlying areas of the city, including kilns on the western foothills of Ikoma Mountain. One reason was their location on the outskirts, which was beneficial for trade at a time when a distribution economy was developing. Despite only a cursory study of distribution, it would appear that the bringing in of Harima, Sanuki and Bizen Sue ware was closely related to the development of marine transportation on the Seto Inland Sea.

From the perspective of religion, from the middle of the 8th century when state Buddhism was at its height changes began to occur in the system of the presentation of earthenware, which had significance in subordination rituals as well as imperial rituals themselves that used large ceremonial vessels. As a result, the role played by the area responsible for supplying Suemura Sue ware, the main type that was used, probably became relatively minor.

During the period of transition, a common production strategy was adopted by kilns across the country. This was a change toward prioritizing economy to achieve a balance between cost and quality. In two periods -- the end of the 6th century and in the latter half of the 7th century - there were many similarities in not only the production strategies but also the techniques introduced to kilns everywhere. However, the latter half of the 8th century was notable for the emergence of diverse choices for techniques, which subsequently led to clear regional characteristics. In broad terms there were four types of regions.

One consisted of the Suemura kilns and Ushikubi kilns that had previously moved away from intensive Sue ware production. One possible reason for this was the decrease in demand for Sue ware stemming from the decline in community festivals and rituals in surrounding society, which was relatively independent. The second region was the Sanage kilns in the Tokai which had used their technical capabilities to build a brand-like status for themselves as a producing region. The surrounding area became a major producer of hard pottery (shiki). The third region comprised Harima and Sanuki, which made the most of the distribution economy and their proximity to urban centers to develop new Sue ware production, such as introducing a system of having different kilns produce different types of ware. The fourth

are the kilns in the Hokuriku, Kanto and Tohoku regions, which had inherited traditional Sue ware production. In contrast, society in the Kinai region, which generated demand for Sue ware, appeared conservative in its governance, economy and religion. These regional characteristics seen in the earthenware industry during the transitional period formed the beginnings of the world of pottery that was to develop from the end of the ancient period through the beginning of the medieval period.